

Title	フランスの社会科学(フランス學會編, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.168- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## フランスの社會科學

(フランス學會編)  
カ江書院發行

かの獨逸の理想主義に率ゐられたる餘りに空なる我が國の社會科學を更新し、内容をより豊富に、その効果をより有益に更新せんがために精進しつゝあるフランス學會により本書が生れたことは寔に欣快の情を禁じ得ぬ。

本書は現代フランス科學の鳥瞰圖に止らず、實にフランス學會諸氏のフランス科學に跡づけられた不朽の紀念塔と稱するも過言ではない。

第一編社會學に於て、田邊壽利氏はフランス現代社會學の題目の下に、コントの社會學、生物學派、人類學派、地理學派、心理學派、デュルケムの社會學、デュルケムに對する反動、デュルケム學派の發展等について叙述され、高瀬莊太郎氏はブーゲレの社會について詳論されてゐる。

第二編、經濟學に於て、芹澤光治良氏は、經濟學に於ける社會學的方法について、詳論され、松浦要氏はソリダリテの經濟學說の題下に、ソリダリテ經濟學の地位、社會連帶責任の内容、ソリダリテ經濟學の理論と協同組合の主義、協同組合主義とフリーエの説等について論述されてゐる。

第三編政治學に於て、松平齊光氏は現代フランスの政治學の題下に、日本に於ける政治學の觀念、ルソウの主權思想、エスマン、デュギー、オーリッウ等について記述されてゐる。

第四編法律學に於て、宮澤俊義氏は公法學に於ける諸傾向の題

下に、此四半世紀以來頗る面目を改めたこと云はれてゐるフランスの公法學の諸傾向について敘べられ、横田喜三郎氏は私法學に於ける諸傾向を述ぶるに當り、氏はデュエニーを中心に筆を進められ、先づデュエニーの自由法論の概要を紹介し、ついでそのうちに見出される諸思想分子の各々について説明を加へられてゐる。又、風早八十二氏は私所有權制度の發展と學說へのその反映の題下に、フランス革命の人權宣言にあらはれた私所有權者の確立と自然法的所有權理論の資本家的意義、農地に於ける共有關係の殘存とその解釋、私所有權制度の史的發展と學說へのその反映等について述べられてゐる。

第五編心理學に於て、波多野完治氏は、先づ現代フランス心理學の主要特徴の概觀を敘述され、内觀心理學、生物學的心理學、病理學的心理學、社會學的心理學等につき論述されてゐる。

第六編倫理學に於て、牧野巽氏は現代フランスの倫理思想につき詳論されてゐる。

第七編宗教學に於て、古野清人氏は最近フランス宗教學界の展望の題下に、神學派の諸研究、宗教史學派の諸研究を紹介し、宗教心理學、宗教社會學、宗教民族學等につき述べられてゐる。

第八編歴史學に於て、間崎万里氏は現代フランスの史學と題し、近世に於ける修史の發達、最近に於ける修史の状態等について詳細に敘述されてゐる。此の一編は史學研究者を益する所、頗る多い。斯くの如き懇切な敘述は氏の如き博覽強記の人にして初めて出来るのである。

最終篇東洋學に於て、松本信廣氏は現代フランスに於ける東洋

學の題下に、エジプト學、アッシリア學、ヘブライ文獻學、聖書解釋、パレスチナ考古學、セム金石學、アラメア研究、エチオピア研究、イスラム研究、古代イラン研究、インド學、支那學等について敘述されてゐる。

廣汎な東洋學を僅か五十頁の中に壓縮された氏の手腕には敬服に値するものがある。フランス在住數箇年に及んだ氏は與へられた頁數の少きを嘆ぜられたことであらう。

要するに本書は、我が學壇にフランス科學の優越性を適當に認めしめんとするフランス學會の目的を充分果したものとはいへやう。(宮島貞亮)

## ラツチエル海洋論

(市川誠一譯  
古今書院發行)

ワシントン會議の事業が繼續されて、此の度ロンドン會議に依つて、新たに海軍々備制限に關する協定が成立したが、これを機縁として海に對する關心の増長したことは、恐らく世界を通じての事實であらう。併してその傾向は我が日本に於て殊に著しきものであるやに感ぜられる。此の時機に當つて、海洋それ自體の政治經濟上の意義を知らしむべく本書の公にせられたことは時の最も宜しきを得たるものである。原書は題して「諸國民發展の原泉として海」さといひ、海上支配の地理學的根據を明かにする爲に一九〇〇年に、その第一版が上梓せられたものである。吾人が疑問とする海洋の諸問題に對して、本書は多くの例證を東西古今の史實に

求めて、端的に明確なる解答を與へたるのみならず、又海洋の地理的考察に對する幾多の深い暗示を提出してゐる。羅馬の世界的覇權の空前にして比類なき組織は、地中海に依る海上聯絡の卓越即ち海洋の統一性に裨益せられたるに依るのである。海岸はその長きを以て尊しむるは謬見である。必要以上の海岸を有することは防衛上の勢力消耗である。陸地の境界に於ては隣接國のみが脅威であるが、海岸は凡ゆる國の勢力に對して解放されてゐる。ヴェニスとリユーベツクの勢威は住昔のシドン或はアテネの勢威の如く、唯一の狭い入江から漠々たる海上を風靡したのである。海は最大なる自然であるが、それは能動的なる勢力の源泉に非ずして、單に通路を提供するものに過ぎない。即ち勢力の源泉は常に陸地である。單に通商國に過ぎなかつたフェニキヤは、新進の諸商業國の競争に敢なく潰えた。これに反し陸地と住民を征服し、自國の領地を堡壘で覆ふたカルタゴの勢力が如何に強大であつたかは、羅馬との戰爭に於て知ることが出来る。又海洋的方面と大陸的方面を有してゐる國に於ては、その重點の移動が重要な意義を有することは、佛蘭西のメキシコに勢力を得んとする企圖に依つて伊太利及び獨逸の統一を容易ならしめた事實に徴して明白である。本書に於て、斯の如き幾多の大洋及び大陸の關係が卓見を以て直截に解説せられてゐる。僅々百五十頁の小著ではあるが、これを熟讀玩味すれば、一言一句興味は津々として盡きざるものあり、よく難解の内容を懇切に譯出せられたる市川氏並に校閱者岡崎教授に深甚なる敬意を表するものである。(有賀春雄)